

第5部 桓武天皇と百済王明信

——百済王は朕の外戚——

桓武天皇の時代に百済王家は全盛期を迎えます。母に百済系の高野新笠を持つ桓武は、百済を強く意識していたと思われます。桓武の時期はまた蝦夷との戦争に明け暮れた時代でもありました。

1. 桓武の蝦夷征伐

(1) 第1次征討

① 伊治公皆麻呂の反乱

大野東人が多賀柵を拠点として支配地を北へと広げ玉造・伊治・牡鹿・桃生などの柵（城）を築き、更に蝦夷を討伐しながら奥羽山脈を横断して日本海側秋田の出羽柵（秋田城）との連絡路を拓いたことは前に述べました。百済王敬福が献上した金を産出した涌谷も多賀城北方の玉造と桃生を結ぶ線上に位置する地であり、蝦夷への支配がかなり北へと広がって行っていたことが分かります。

朝廷は蝦夷が帰順するとその地の族長の支配権を認めながら税を課して収奪を図りました。769年に「陸奥の伊治城・桃生城の周辺に坂東の民を移す」と続日本紀が伝えるように、主として関東地方の浮浪者などを蝦夷の地に送り込んで生産の増強も図られました。また東海道・東山道で徴発された兵士たちは、戦争の無いときには農耕に従事していたのですから、そのまま農民として定着するものも現れます。また兵士が甲冑などの鉄製品を蝦夷の生産物と交換するという交易が行われて、経済的な活動が自然に広がっていくことは、現地の朝廷側支配者にとっては好ましいことでもありました。

しかし税によって収奪されて、権威だけは保たれても経済的に恵まれなくなった蝦夷の支配層にとっては、屈辱的なことでもあったでしょう。774年に陸奥の蝦夷が桃生城に侵入していますし、775年には出羽国の国守が反乱に耐えられずに国府の移転を願っています。これに対して朝廷側の軍も蝦夷の拠点に対して攻撃を加えますが、一進一退の状況が続き戦線は膠着状態におちっていました。このような状況の中で、伊治城地域の蝦夷の族長で朝廷に帰順して外従五位に叙せられていた伊治公皆麻呂が反乱を起こしたのでした。

780年、陸奥按察使兼鎮守府副将軍紀広純は伊治城の北方に覚鰲（カクベツ）城を築いていました。これは蝦夷の拠点であった胆沢城へ進撃するための足がかりを造るためのものでした。皆麻呂は表向きはこれに協力するような態度を取りながら、この築城に反発する蝦夷に呼応して兵を起し、広純を殺害してしまいます。そして陸奥国の国府多賀城を襲い、鎮守府倉庫にあった夥しい武器と食料を略奪し、城郭に火を放って北方へ引き揚げました。この伊治皆麻呂の反乱は光仁天皇を痛めつけ、氣力を失った光仁は病気を理由に譲位することになります。



② 征東の準備

光仁の跡を嗣いだ桓武にとって陸奥の回復は緊急の課題でした。光仁は反乱を鎮圧するために中

納言藤原継縄を征東大使に任命して陸奥に派遣しますが、蝦夷征伐を前に多賀城を復旧しなければならず、土豪や農民は蝦夷の攻撃を恐れておびえ、兵士もまた全く氣勢が上がらず、戦闘どころではないという状態でした。そこで継縄を解任して藤原小黑麻呂を征東大使とし、陸奥鎮守府副將軍に百濟王俊哲を派遣しましたが、俊哲は蝦夷に囲まれて辛うじて危機を脱出するという敗北を喫します。このような状況の中で、光仁は桓武に譲位したのでした。

小黑麻呂は戦闘に見切りを付けて征東部隊を解体したいと願い出ますが、桓武は「賊衆は4千余人もいるのに、首級をあげたのはわずかに70余人ではないか」と言ってこれを拒否します。しかし小黑麻呂は桓武に背いて平城京に引き揚げました。それにも関わらず桓武は小黑麻呂を従四位から正三位に昇進させているところを見れば、小黑麻呂の意見の正当さを評価し労をねぎらったものとみるべきでしょう。これによって桓武は決意を新たにし蝦夷討伐のための周到な準備を始めることになります。

まず延暦元年（782）5月に、打ち続く戦乱のために離散していた陸奥国奥郡の農民に対して3ヶ年の免税を行い、更に翌783年にはそれを出羽国の雄勝・平鹿2郡にも及ぼしました。桓武は辺境における民力の回復が優先課題と考えたのでした。また、私寺の新設や寺領の拡大を禁止します。戦費調達のために貴族の私財が他の目的に流出するのを防ぎました。次に長岡京遷都を実施します。朝廷内の退嬰的な気風の一新し、戦闘準備のための人と物資の交通の便を図ったのでした。遷都の年の延暦3年（784）には大伴家持を征東將軍として派遣します。（翌785年に家持は現地で死去します。）家持は陸奥国に多賀・階上の2郡をたてることを進言しました。郡に官人をおいて蝦夷の急襲などに対して機敏な処置が出来るようにするのが目的で、桓武はこれを直ちに許可しました。

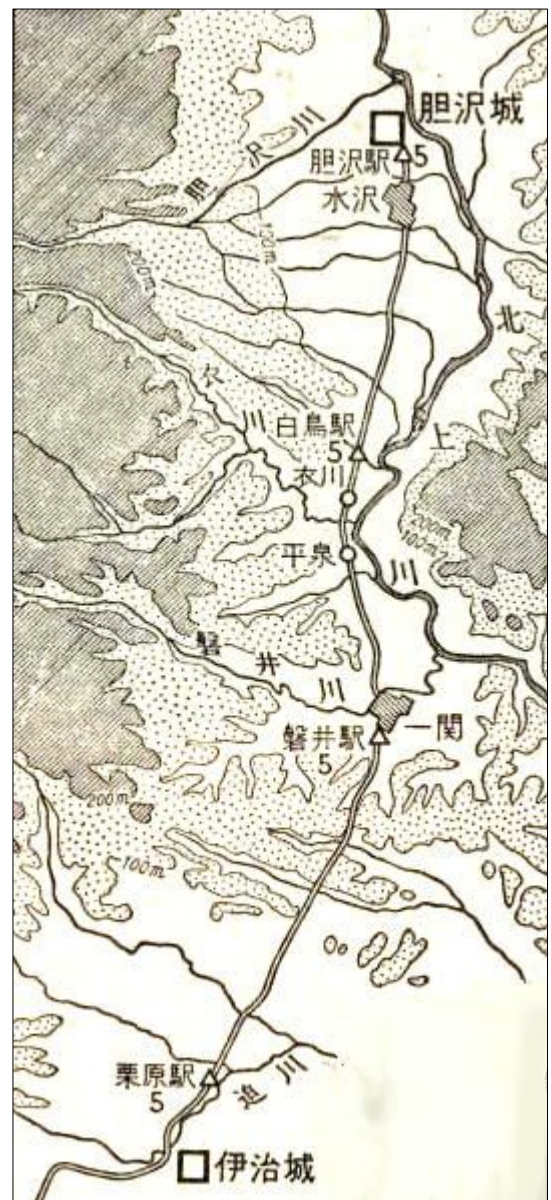
延暦5年（786）になるといよいよ蝦夷征伐が現実のものとなってきて、東海・東山両道の軍団の兵を検閲し武具を点検させ、6年（787）には百官や国司が蝦夷と交易することを禁じます。7年（788）には兵糧として米・糲・塩などを名賀城に運び、征東大使として紀古佐美を任命します。

こうして蝦夷征伐の準備は整いました。

③ 征東大使紀古佐美

桓武は古佐美に勅書を与えて「一旦將軍に推挙され征討の途にのぼれば、一切を將軍に任せる。これまで副將軍らは軍令を守らず逡巡して留まったり間違ったりする者が多かった。が、その理由を聞くと、まさに法を軽減したことに原因があった。もし、副將軍が死罪に当たる罪を犯すようなことがあれば、拘禁して朕に奏上するように。軍監以下の者が法を犯した場合には、法によって斬罪を執行せよ。坂東が安泰か否かはまさにこの一挙にかかっている。將軍はこの遠征を成功させるように。」と命じました。天皇の決意が伝わります。

延暦8年（789）3月9日、諸国の軍兵は多賀城に集結し、道を分けて蝦夷の地へと攻め入り



ました。ところが5月12日、桓武は征東將軍古佐美に対して次のように勅しています。

「近頃の奏上を見ると、官軍は先へ進まずに、なおも衣川に留まっていることがわかる。去る4月6日の奏上では『3月28日に官軍は河をわたって3ヶ所に陣營を置きました。その態勢はまるで鼎の足のようです』と報告している。しかし、それからもう30日も経ている。どういうわけで、このようにぐずぐず居続けて進軍しないのであろうか、と不審に思う。今以てその理由が分らない。(中略)ただ汝らは長い間一ヶ所に留まって日を積み重ね、兵糧を費やしている。朕はこのことだけは不審に思う。それで、留まっている理由と賊軍の消息を詳しく書いて、駅使に託して奏上してくるようにせよ。」征討の途にのばれば一切を將軍に任せる…と言われたのですが、とても心穏やかではいられずに、將軍の戦術はおかしいのではないかとの催促です。

しかし、6月3日になって古佐美から届いた奏上文は次のようなものでした。

「副將軍入間広成と左中軍別將池田真枚は、前軍別將安倍墨縄らと謀議して、3軍(前・中・後)が同じ作戦で力を合わせ、河(北上川)を渡って賊を討つことにしました。その期日もすでに決めおわりました。それで、中軍と後軍からそれぞれ2千人を選び出し、一団となって河を渡りました。賊の首領の阿弭流為の居所に近づいた時、賊徒が3百人ばかりいて、官軍を迎え討ち、合戦になりましたが、官軍の勢いが強くて、賊徒は退却しました。官軍は戦いながら村々を焼き払いつつ、巢伏村に至り、別の道から進撃していた前軍の軍勢と合流しようとしてしました。ところが、前軍は賊徒に阻まれていて、河を進み渡ることができません。そこへ、賊徒が8百人ばかり次々とやって来て官軍をさえぎり戦いました。その力は大変強く、官軍が少し後退しますと、賊徒は直ちに追い打ちをかけてきました。さらに、賊が4百人ばかり河の東の山から現れて、官軍の背後の道を断ってしまいました。官軍は前後を挟みうちにされ、一方、賊徒はいよいよ奮い立って攻撃をかけてきました。官軍は押し払われて、別將の丈部善理・進士の高田道成・会津壮麻呂・安宿戸吉足・大伴五百継らがいずれも戦死しました。

「総計しますと、焼き滅ぼした賊の集落は14ヶ村、家屋は8百戸ばかり。武器や種々の物については別に示したとおりです。官軍側では、戦死した者25人、矢に中った者245人、河に飛び込んで溺死した者1,036人、裸で泳ぎ着いた者1,257人です。別將の出雲諸上・道嶋御楯らは、残兵を率いて還ってきました。」

これに対して桓武は、この大敗は作戦の誤りであると指摘すると共に丈部善理などの死に対して哀悼の意を表しています。そこへ引き続いて6月9日、古佐美からの奏上が届けられました。

「胆沢の地は賊徒たちの中心地です。ただ今、大軍をもって征討し、村々を滅ぼしましたが、残党が潜伏していて、人を殺したり物を略奪したりしています。また、子波(志波)や和我の地は遠くはなれた奥深いところにあります。私たちが遠く進んで賊に接近し征伐しようと思いましたが、食糧の運搬が困難です。玉造柵から衣川の營に至るまで4日、食糧や軍用品の受け渡しに2日間、そうしますと往復で10日かかります。衣川から子波の地に至るまでの行程を仮に6日としますと、食糧・軍需品の受け渡しも入れて、往復で14日です。総計して、玉造柵から子波の地に至るまで、往復24日の行程となります。途中で賊にあつて合戦したり、雨に妨げられて進めなかったりする日はこの行程に含めていません。また河と陸路を使って食糧や軍用品を運搬する者は、12,440人で、一度に運べる糶は6,215石です。征討軍27,470人が1日に食べる量は549石ですから、これをもって補給と消費を計算しますと、一度に運べるものでは、わずかに11日間しか支えることができません。



「私たちが考えますに、この状態で子波の地にむかうには、補給も消費もこもごも不足します。か

といって、征討軍の兵を割いて運搬員に加えれば、征討軍の数が少なくなり、征討するのに不足します。またそればかりでなく、軍隊が賊地に入ってから、春が過ぎ夏にわたり、征討軍や運搬者たちはともに疲れ弱っております。進攻するには危険があり、持久戦にも利がありません。久しく賊地に駐屯し、兵糧を百里以上も離れた地へ運ぶのは良策ではありません。それに、虫のようにうごめいている小さな敵が、ひとまずは天の下す誅罰を逃れたといいましても、水田や陸田はもはや耕し種を蒔くこともできず、すでに農耕の時期を失っています。後は滅びるしかありません。私たちは話し合って、征討軍を解散脱出させ、食糧を残して非常の時の支えとすることを最良の策としました。また征討軍の兵の1日に食べる量は2千石になります。もし征討軍解散のことを朝廷に上奏して裁定の返答を待つとなりますと、さらに無駄な費用が増えることを心配致します。それ故、今月10日以前に、征討軍を解散して兵士を賊地の外に出すようにとの書状を諸軍に送り知らせます。私たちの討議の結果を奏上します一方で、並行してこれを実行しようと思います。」

桓武はこれに対して「少しも賊地に進入せず、にわかに戦を止めてしまうという、將軍たちの策の道理はどこにあるのか。將軍らほうわだけを飾った言葉で、罪や過失を巧みに逃れようとしている。臣の道にそむくことこれ以上のものはない」と憤りを露わにしますが、7月17日には更に「…『天子の兵が加わるのですから向かうところ手強い敵などありません。』とか『大兵を挙げて一度攻撃すると、たちまち荒廃の地になりました。』などと言っている。しかし事の経過を追ってみれば、これらは殆ど虚飾である。」と断じています。

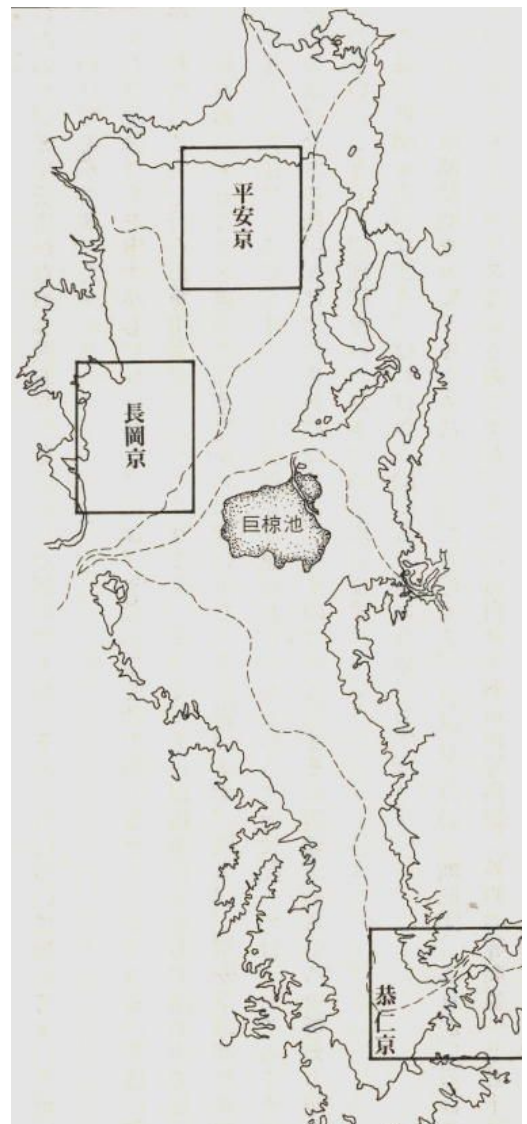
9月8日に征東大將軍紀古佐美は陸奥から帰還しました。桓武は法に照らして罪を問い罰すべきものであるが、以前より仕えていることを思い起こして、罪を問わず許すこととされました。桓武の強い意志にも拘わらず、現地に赴いた將軍たちは蝦夷討伐についての意識がそれ程高くはなかったのではないのでしょうか。一方、蝦夷の族長たちの征服者に対する反抗心は強かったとしても、民衆同士の交わりはごく自然に行われていて朝廷側と蝦夷との対立意識は薄く、だからこそ朝廷の軍は蝦夷の大きな抵抗を受けずに衣川付近まで進軍することが出来たのです。將軍たちは都と現地の意識の落差を実感したように思われます。そのことを報告した古佐美は、桓武の理解によって許されたのではないのでしょうか。

(2) 蝦夷討伐の終焉

しかしながら桓武は光仁天皇の苦悩を忘れることが出来ませんでした。また渤海国に対する面目の問題もありました。また蝦夷の指導者阿弭流為らの力も思い知らされました。そこで再び周到な準備のもとに蝦夷征伐を行うこととなります。

① 国家的大事業

延暦9年(790)に入ると桓武は次の征討への準備に掛かります。3月には多治比浜成を陸奥按察使兼陸奥守に任命し現地の敗戦処理に当たさせます。そして4年後に第2次征討軍を派遣することとし、その規模を10万へと倍増し、その兵士と武器の調達方法を討議しまし



た。軍事会議では第1次遠征の不備が指摘されました。第1に、坂東の諸国においては、強壮な農民は武力をもって奉仕し、貧弱な者は輸送の労役についたのに「富饒の輩」は出陣を免れている。第2に、東海・東山両道では大規模な動員が行われたのに、他の諸国の農民は軍役を免れて遠征に何ら関与していない。この二つは極めて不公平であるとして、諸国の国司に対して国内の人名を身分の如何に関わらず書き出し、そこで造り得る甲の数を報告するように命じました。桓武はこれを実現するために法令を制定して天下に公布します。全国に対する総動員令です。蝦夷討伐に対する意識の高揚と軍事力の拡充が国家的大事業として行われることになったのです。

791年1月朝廷は、兵士の観閲と武器の点検のために、百済王俊哲と坂上田村麻呂を東海道の、藤原真鷲を東山道に派遣しました。全国に動員令を出したのですが、武器への協力は比較的容易に出来たとしても、人の動員はなかなかうまくはいきません。結局は第1次と同じように東海・東山両道での動員が主力となったようです。経験者を優先せざるを得なかったということでしょう。7月には征東大使に大伴弟麻呂を任命し、百済王俊哲・多治比浜成・坂上田村麻呂・巨勢野足を副使に任命しました。こうして準備態勢が整えられると、以後3年に亘って実質的な武器調達と兵士の訓練が行われました。実はこの期間は、桓武にとってもう一つの国家的大事業であった平安遷都の準備が進められていた時期でもあったのです。

794年1月、征夷大將軍大伴弟麻呂は陸奥国へと向かいます。征東大使という名はこの時に征夷大將軍という名に変わっており、蝦夷は夷敵として討伐すべき存在として明確化されたのです。蝦夷に対する大攻撃は6月の半ばに副將軍坂上田村麻呂の指揮のもとに開始されました。その戦闘の様子は日本後紀のこの部分が欠落していて分かりません。弟麻呂が10月末に桓武に報告したところによると、斬首457人、捕虜150人、馬85匹、蝦夷の村を焼くこと75ヶ所であったということです。朝廷軍の損害については全く分かっていません。蝦夷の拠点であった伊沢城の攻略はならなかったようで、蝦夷の抗戦の激しさが窺えます。かくて第2次の蝦夷討伐も不成功に終わってしまいました。

② 坂上田村麻呂

桓武にとって蝦夷討伐は執念のようなものでした。第2次の戦闘の結果を踏まえて桓武は、796年1月に坂上田村麻呂を陸奥出羽按察使兼陸奥守に任じ、10月には鎮守府將軍をも兼務させました。これによって田村麻呂は奥羽での行政と軍事の権限をすべて保有する地位に立つことになりました。大伴弟麻呂の進言もあったことでしょうが、この大抜擢には田村麻呂に対する桓武の信頼の厚さが窺えます。坂上氏は応神天皇の頃に百済から渡来した阿知使主の子孫である東漢氏の一族であり、従って田村麻呂も百済の血を受け継いだ人ということになります。

田村麻呂の父の苅田麻呂は坂上氏を第1級の氏族に押し上げた人物といってよいでしょう。もともと東漢氏の流れを受けて武人として活躍してきた坂上氏でしたが、苅田麻呂は称徳帝時代の藤原仲麻呂の乱において大きな功績をあげて栄進のチャンスを掴みました。そして770年光仁天皇即位の年に陸奥鎮守府將軍に任じられています。その時から坂上氏は陸奥国との深い縁が出来たものと言えるかも知れません。苅田麻呂は786年に死去していますが、その時には従三位下総守



でしたから破格の昇進を果たしたと言えるのかも知れません。田村麻呂はこの父の勢いを受け継いで登場してきたと言えるでしょう。

奥羽の最高指導者についた田村麻呂は、先ず玉造城と伊治城の間に新しい駅をつくり、伊治城周辺に坂東諸国・出羽・越後の農民9千を移します。これらの農民は前2回の合戦の経験者が多く、万一の時には兵士として活躍する人たちでした。田村麻呂は翌797年11月に2代目の征夷大將軍に任ぜられます。そして田村麻呂は次の戦争に備えて蝦夷の地の懷柔工作を行ったのでした。

801年2月、第3次蝦夷討伐が始まります。この戦争についても日本後紀の記事が失われているため詳細が不明です。しかし朝廷軍が胆沢を越えて奥地の閉伊村まで進撃したことが報告されていますから、胆沢を攻略したことは間違いないでしょう。そして802年1月には朝廷は胆沢に城郭を築くことを決定し、田村麻呂を造陸奥国胆沢城使としています。こうして胆沢城は多賀城に代わって陸奥最大の軍事拠点となりました。



蝦夷の首領として朝廷軍に抵抗し続けた大墓公阿豆流為と盤具公母礼は、5百の配下を率いて田村麻呂に降伏しました。今後の陸奥経営のために二人の力を利用すべきであると考えた田村麻呂は、その降伏を受け入れ二人を引き連れて都平安京へ帰還しました。田村麻呂は彼らの力量と人格を認めて助命を懇願しますが、朝廷の貴族たちは「野生獣心、反復して定まりなし」としてこれを聞き入れず阿豆流為たちは処刑されてしまいます。

処刑地については河内の「植山」「梶山」「杜山」が挙げられていますが、河内にはこの名が見当りません。植山については枚方市宇山が比定されていてその胴塚とされたマウンドがありましたが、それは200年以上も古い古墳であることが分かりました。また牧野公園内（元片埜神社の境内）には首塚と言われる塚があつて、そこには平成19年（2007）に「伝 阿豆流為・母礼之塚」の石碑が建立されました。阿豆流為らの地元である岩手県奥州市では平成17年（2005）に水沢区羽黒山に慰霊碑が建てられました。慰霊碑の下には枚方市牧野の首塚で採取された土が埋められています。JR東北本線の快速列車の1本には阿豆流為の名前が付けられているようで、郷土のために奮迅の活躍をした阿豆流為を顕彰する動きが活発なようです。



胆沢城建設の翌803年には胆沢北方の斯波村にも城を築くことが決定され、これも田村麻呂が担当することになりました。こうして22年間に及んだ蝦夷討伐が終焉し、奥羽の地が桓武の朝廷に帰属することになったのでした。田村麻呂はその後桓武にその力を認められて昇進を続け、左大臣にまで登り詰めます。

2. 野行幸

（1）桓武の野行幸

桓武は長岡京・平安京の近郊に行幸し遊獵を楽しみました。特に鷹狩りは自ら鷹を使う程のマニアになっていたようです。遊獵を楽しむ行幸、或いは行幸の途次に遊獵を楽しむ天皇の行為を野行幸と言っています。「野」とは丘陵とか岡を指している言葉であり、これに対して「田」とは低地や湿地を指しています。

① 野行幸の目的

遊獵には主として二つの目的がありました。一つは漢方薬として鹿の角を取ることでしたが、もう一つには軍事訓練という大事な目的がありました。蝦夷征伐に明け暮れた桓武にとって、にわかには兵士となる農民を統率する貴族や官人たちの軍事訓練は重要な行事でした。3回に亘った蝦夷征伐の間には数年の期間を設けていますが、この間にかかなりの訓練が行われましたが、桓武の度重なる野行幸にはこの訓練が含まれていたものと考えられます。

野行幸を行うに当たってのあらましについて「新儀式」には次のように書かれています。野行幸即ち鷹狩りで、その実施状況がよく分かります。

- ・ 日を決める
- ・ 鷹・ハイタカ（小型の鷹）飼のほか、獵に詳しい親王や五位以上の官人の参加を許す
- ・ 現場調査
- ・ 7～8日前に留守役を決める
- ・ 参加する貴族たちに摺衣を着ることを許す
- ・ 4日前に行幸の通知
- ・ 前日に時間を決定
- ・ 当日、貴族は内裏に集合、天皇は内裏の南殿（紫宸殿）に出御
- ・ 王卿は特に黄青色の上着を着用する
- ・ 帯剣者は後鞘をつける
- ・ 鷹やハイタカを使う王卿は狩衣・深履を着て、笏を持つ
- ・ 天皇の輿が出発する。鷹飼は近衛の前を歩く
- ・ 京極大路までは京職が先導
- ・ 野口で留まり、近衛は陣を張り、鷹飼らは天皇の輿の前に立つ
- ・ 鷹飼や親王公卿は狩をはじめ
- ・ 別の司は景勝の地を探し、御在所を造る
- ・ 天皇の座が定まると、王卿を集め、鷹飼たちは鷹やハイタカを繋いで退出
- ・ 朝御飯
- ・ 天皇は直衣に着替えて輿に乗って野の中へ入り、獲物を受け取る
- ・ 岡に上がる時は椅子を岡の上に置き、縁道を用意し、近衛中將が剣と璽を持って従う
- ・ 獲物を調理し、王卿以下に給う、山城国も酒肴を出す
- ・ ここで見物の車に特に野に入って狩を見ることを許すこともある
- ・ 音楽演奏
- ・ 賜り物
- ・ 宮に帰って樂を奏す

これを見ても朝早くから王侯貴族らが勇ましく準備をして野へと向かい、天皇の前で狩を繰り広げるさまが目に見えます。当時の朝廷での仕事は朝早く、門が開けられると同時に始まるのですが、最も早い時季は芒種（6月5日）から夏至（6月22日）の間で午前4時半、最も遅い時季の大雪（12月7日）から冬至（12月22日）の間でも午前7時頃に始まったのです。夜明けと共に始まったと言えます。ですから貴族が南殿に集合したのはこのような早朝でした。また、食事は日に2度で、朝食は午前10時頃、夕食は午後5時頃と決まっていました。朝食までに一仕事というわけで、野行幸においても朝御飯までに狩を楽しんでいます。通常、仕事は午前中に終わっており、官人にとって午後は自由な時間でした。遊獵においても午後は宮に帰って音楽を楽しんでいます。省エネが叫ばれている現在、見習いたいような生活です。なお、鷹狩りは無届けで行うことが禁止されていて、事実上は天皇が行幸して行う行事となっていました。鷹飼も貴族が務めるものとされていたようです。

② 鷹狩りは百済から

この鷹狩りは百済から入ってきたようで、日本書紀仁徳条に「鷹甘部の定め」として次のような話があります。

「41年春3月、紀角宿禰を百済に遣わして、始めて国郡の境の分け方や、それぞれの郷土の産物を記録することを行った。このとき百済王の王族酒君が無礼であった。それで紀角宿禰は百済王を責めた。百済王は畏まって鉄の鎖で酒君を縛り、襲津彦に従わせて進上した。酒君は石川錦織首許呂斯の家に逃げかくれた。偽っているのに、『天皇は私の罪をすでに許して下さった。それであなたに付けて生かして下さい』と。久しくしてから天皇はその罪を許された。」とあって、酒君が百済の王族の人であることが分かりますが、さて43年の条に次のように記されています。

「43年秋9月1日、依り網の屯倉の阿珥古が変わった鳥を捕まえて天皇に奉り、『私はいつも網を張って鳥を捕っておりますが、まだこんな鳥を捕ったことはありません。珍しいので献上致します』といった。天皇が酒君をよんで、これは何の鳥かと尋ねられた。酒君は答えて、『この鳥の類は百済には沢山います。馴らすと人によく従います。また速く飛んでいろいろの鳥を取ります。百済の人はこの鳥を俱知といいます』といった。これは今の鷹である。酒君に授けて養わせた。いくらか経たぬうちに馴れた。酒君はなめし革のひもをその足につけ、小鈴をその尾につけ、腕の上にとまらせて天皇に奉った。この日百舌鳥野におでましになって狩りをされた。そのとき雌雉が沢山飛び立った。そこで鷹を放って捕らせると、たちまち数十の雉を得た。この月はじめて鷹甘部を定めた。時の人はその鷹を飼うところを名づけて鷹飼邑といった。」

こうして百済からもたらされた鷹狩りは天皇や貴族の遊猟として引き継がれてきました。百済にはいくらでもいる鷹がわが国には殆どいなかったのでしょうか。鷹が貴重な鳥であったからこそ天皇や貴族のものとして鷹狩りがあったのでしょうか。



③ 交野への行幸

延暦2年(783)10月14日、桓武天皇が交野へ行幸、鷹を放って遊猟。16日に百済王一族を昇進させました。利善を従四位下に、武鏡を正五位下に、玄徳と玄鏡を従五位上に、明信を正四位上に、貞善を従五位下に昇進させたのです。そして百済寺に近江・播磨の正税各5千束を施します。

延暦6年(787)8月24日、桓武は高埼津(山崎の津)へ行幸の帰途、大納言藤原継縄の邸宅に立ち寄り、継縄の正室で正四位上の百済王明信に従三位を授けました。10月17日には、交野へ行幸し、鷹を放って遊猟。継縄の別業を行宮とします。20日に継縄は百済王らを率いて種々の楽を奏上します。そして、百済王玄鏡を正五位下に、元信・善貞・忠信・明本を従五位下に昇進させたほか、継縄の子の藤原乙叡(タカトシ)を正五位下に任じます。ところで、8月の行幸の時に桓武が立ち寄ったのは継縄の邸宅であり、10月に行宮としたのは継縄の別業です。邸宅は当然長岡京にあったでしょうし、別業(別邸)が交野にあったのでしょうか。交野は百済王の本拠地でしたから、妻明信との関係で継縄はここに別業を造っていたと思われます。

延暦10年(791)10月10日、交野行幸、鷹を放って遊猟。この時も継縄の別業を行宮とします。そして継縄は百済王を率いて百済楽を奏上します。玄風・善貞を従五位上に貞孫を従五位下に昇進させ、乙叡を従四位下に昇進させています。

延暦11年(792)9月には桓武はまた交野で遊猟しますが、この年は水生野・大原野・栗隈

野などの各地で猟を行っています。11月に葛葉野での遊猟があります。葛葉野は交野ヶ原の一部に属した、現在の樟葉地区に当たるところでしょうか。それとも葛野のことでしょうか。延暦12年（793）8月には葛野に遊猟し、継縄の別業で侍臣や大臣の子弟に衣を賜っています。葛葉野と葛野（カドノ）があって紛らわしいのですが、平安京の定められた地が葛野で、葛野郡は京都盆地全体を含んだ地域でした。猟が出来るような原野があちこちに広がっていたでしょう。葛野への行幸は明らかに遷都のための下見でした。

同年の11月10日には、交野に遊猟、継縄は摺衣を献上し、それを五位以上の貴族たちと命婦・采女に下賜されています。その後桓武は794年に平安京への遷都を行い、交野への遊猟の機会が減ってしまいますが、それでも794・795・799の各年に遊猟されました。

（2）交野の行宮

① 藤原継縄

藤原継縄とはどのような人物だったのでしょうか。藤原三家について前に述べましたが、継縄は南家に属します。藤原不比等と蘇我娍子の間に生まれた武智麻呂・房前・宇合の3兄弟の中で、長男武智麻呂に属する家系が南家です。継縄は武智麻呂の子の豊成の子で、淳仁天皇をめぐって孝謙上皇と対立して事変を起こした藤原仲麻呂は豊成の弟であり、継縄の叔父に当たることになります。仲麻呂は政治的な画策を積極的に行うような策略士でしたが、豊成は温厚篤実な性格で仲麻呂の動きには賛同せず、一時乱による謹慎処分を受けたものの間もなく右大臣として政治の中枢に返り咲きます。継縄は乱の時には急遽越前守に任じられて仲麻呂の越前入りを防ぐ役割を果たします。

仲麻呂によって著しく信用を失墜した南家でしたが、豊成・継縄によって急速な回復を成し遂げたのでした。

770年に白壁王が即位して光仁天皇が誕生すると、継縄は従四位上に叙せられ、正妻の明信も続いて正五位下に昇進しています。771年1月には継縄は正四位上に特進。2月13日に光仁は交野に行幸していますが、恐らく厚遇に应えて継縄が明信の住む交野の別業に光仁を招待したのではないのでしょうか。翌14日に難波宮に到着していますので、難波宮に何らかの目的があって行幸を計画した光仁に対して、継縄が交野へ寄り道することを勧めたと思われます。そして妻の明信と百済王一族にその接待を命じました。百済の王族の血を受け継いだ高野新笠を夫人としていた光仁にとっては願ってもない喜ばしいことだったに違いありません。山部親王も当然同行されたでしょう。接待に当たった明信と山部親王（桓武）との関係がこの時に始まったと思われます。

その後も継縄の昇進は目覚ましいものがあり、同年（771）11月に従三位、772年2月に大蔵卿、同年11月に宮内卿、774年9月に左兵衛督兼兵部卿、775年には明信は正五位上に昇進します。780年2月に中納言となった継縄は、3月に陸奥国で伊治公皆麻呂の反乱が起こると征東大使に任命されますが、わずか半年後には解任されます。武将としては適任でなかったのでしょう。781年、桓武天皇が即位されると5月に中務卿に就任します。7月には左京大夫を兼務、9月には大納言に昇進します。785年には7月に太宰帥を兼務し、11月に安殿親王が立太子すると皇太子傳をも兼務します。そして786年4月には従二位に昇進しています。

787年8月24日には桓武は高崎津行幸の帰りに継縄邸に立ち寄り、妻の明信に従三位を授けていますが、この年の10月17日には交野で遊猟の後継縄の別業を行宮としており、百済王一族は種々の樂を奏上しています。11月5日に桓武が交野に天神を祀った際に継縄は祭文を奉っています。788年1月15日、皇太子の元服に当たっては皇太子傳として冠を被



京都時代祭の明信

らせる役目を仰せつかっています。790年の2月には右大臣に昇進。791年には菅野真道・秋篠安人らと共に国史編纂事業に携わり、794年8月に「続日本紀」の後半14巻を編纂して呈上しました。796年に薨じますが、桓武から従一位を追贈されます。

日本後紀には継縄について「謙恭にして自守。政迹聞かず、才識無しと雖も、世の譏りを免るるを得たり」と記されています。謙遜ではあるけれども政治のことには通じておらず、才能も知識も無かったが、批判はされなかったと言っているのです。これを見ても、妻明信が桓武に寵愛を受けることによって昇進の機会を与えられたことは疑いのないことでしょう。継縄の子の乙叡が薨じた時の日本後紀の記事は「母尚侍百済王明信、帝の寵渥を蒙る」と書かれています。乙叡は第6部の中で述べます吉子の変に連座して左遷されてしまいますが、継縄と同じく乙叡にも北家のような政治的才覚がなかったようです。

② 継縄の別業

桓武は交野への遊獵の際に何度も継縄の別業を行宮とされていますが、さて継縄の別業はどこにあったのでしょうか。先ず継縄に関係があると考えられる桓武の遊獵地として次の3つの名前が上がっています。交野・葛葉野・葛野です。この中の葛葉野は葛野のことではないかと思うのですが、南樟葉に継縄屋敷（ケイジョウヤシキ）という字名が残されていますので、ここに継縄の屋敷があった、葛葉野は樟葉の野のことで、交野での遊獵というのもまた葛葉野での遊獵であるという見方もあります。しかし葛葉野という呼び方があったかどうかは不明です。

葛野はカドノと読まれて京都盆地全体を表す言葉です。793年には2月に水生野と栗隈野、7月と8月に大原野で遊獵、そして同じ8月に葛野にて遊獵され継縄の別業で侍臣や大臣の子弟に衣を賜っています。葛野で遊獵の後継縄の別業に行幸されたというのが、この別業は交野の別業とは異なるようです。葛野がカドノであるとすれば交野の継縄屋敷まで出掛けるとするのは不合理でしょう。葛野でも継縄は早速に別業を建てたのではないのでしょうか。

交野では継縄の別業で継縄が百済王らを率いて楽を演奏しています。そして百済王一族を昇進させていますから、この記事から見る限り継縄屋敷は百済王一族が本拠とする中宮にあったと言えるでしょう。中宮にある百済王神社の正面鳥居のそばには「交野行宮址」の小さな石碑がたっていますが、この辺りは百済寺の敷地内と思われるので適切な場所ではないと思われますが、他に特定出来る場所が見つからない現状では、これを移設することも出来ません。



樟葉か中宮か、いずれが継縄の別業のあった地かということは、中宮有利と言わざるをえません。当時の貴族はその時の都合に応じて別業を建設する力を持っていたと思われるから、桓武の遊獵の場所に合わせて樟葉にも別業を建設したことは十分に考えられることです。いずれにしても、継縄の別業桓武が行宮として利用し起居したことは、大きな目的の一つとして明信の存在があったことは論を待たないところです。

継縄は796年、平安遷都数年にして死去しますが、これを境として桓武の交野遊獵はめっきりと減ってしまいます。遷都によって葛野が遊獵の中心になっていったことが大きな理由でしょう。しかし明信を訪ねての交野行幸は続きました。

桓武の交野への行幸（12回）と主たる項目を年次順にまとめておきましょう。

・771 2月13日 光仁天皇交野へ行幸。（山部親王同行か）

- ・ 783 10月14日 交野に行幸。鷹を放ち遊猟する。
(16日) 百済王氏の数人が位階を受ける。
- ・ 785 11月10日 交野の柏原に郊祀壇を築き、天神を祀る。
- ・ 787 8月24日 高埼の津に行幸。継縄邸に立ち寄り、明信を従三位尚侍に任ずる。
- ・ " 10月17日 交野に行幸し遊猟する。継縄の別業を行宮とする。
20日 継縄、百済王氏を率いて種々の楽を奏ずる。
百済王氏の数人が位階を受ける。
- ・ 790 2月27日 桓武天皇は「百済王らは朕の外戚である。ゆえにいまその中から1,
2人を選んで、位階を進め授ける」と詔された。
- ・ 791 10月10日 交野に行幸し、遊猟する。継縄の別業を行宮とする。
百済王氏の数人が位階を受ける。
- ・ 792 9月28日 交野へ遊猟。
- ・ 793 5月11日 百済寺に錢30万と長門・阿波の稻各1000束を施入。
- ・ " 11月10日 交野へ遊猟。
- ・ 794 9月22日 交野へ遊猟。
- ・ " 10月13日 交野へ遊猟。
- ・ 795 3月27日 交野へ遊猟。
- ・ " 10月16日 交野へ行幸。継縄の別業を行宮とする。
- ・ 796 7月16日 継縄薨ずる。
- ・ 797 5月28日 百済王氏の課役と雑徭を永久に免除する勅を下す。
- ・ 799 2月 8日 交野へ行幸。
- ・ " 10月 9日 交野へ遊猟。
- ・ 800 10月17日 交野へ行幸。
- ・ 802 10月 9日 交野へ行幸。
- ・ 806 3月24日 桓武天皇崩御

3. 尚侍百済王明信

(1) 従二位尚侍

藤原継縄の正妻百済王明信は、大仏建立の際に聖武天皇に金9百両を献上して一躍従三位に昇進した百済王敬福の孫娘であり、その政治的才覚と人情味の豊かさを受け継いだ才色兼備の女性だったようです。弟の俊哲は武将としての才覚を現し、791年の第2次蝦夷征伐においては坂上田村麻呂らと並んで征東副使として活躍しています。

桓武がまだ山部親王であったときに光仁天皇の交野行幸のお供として継縄の別業を訪れましたが、明信は壮年山部の手厚い接待役を任され、それが桓武と明信を結び付けたであろうことは、想像に難くありません。凡庸で昇進の遅れていた継縄が、ある時からトントン拍子の出世を成し遂げた背景には、桓武の明信への寵愛がありました。その継縄が796年に薨じますと、明信は桓武の後宮に入ります。

① 従三位尚侍

明信は最終的には従二位尚侍に就くのですが、尚侍とは現代的に言うならば宮内庁長官という地位のことです。783年即ち長岡京遷都の前年に桓武は初めて交野に行幸されますが、明信はその後すぐに従四位尚典(ナシノスケ)に任じられます。継縄を夫とする身でしたが、桓武は明信

に桓武の身の回りの世話をする役を与えられたのです。

尚典とは内侍司（ないしのつかさ）即ち宮内庁の次官といった地位になります。明信の接待役としてのすばらしさを天皇が認めて抜擢したということが表向きの理由だったでしょう。しかし桓武の心には親王時代からの明信に対する熱い思いがありました。783年の交野行幸は明信への思いを遂げる手段だったと言えます。そして尚典への抜擢は明信を我が身の側に置く最良の方法でした。継縄という夫を持つ身の明信としては直ちに天皇の後宮に入ることは叶わなかったと思われますが、頻繁に桓武の後宮に出向く口実が出来たことは確かでしょう。

当時の天皇には皇后のほかに妃、夫人、嬪などとたくさんの奥方がおられますが、いつも天皇と一緒に暮らしているわけではありません。申し訳ない言い方ですが多くの貴族から娘を献上されて好きでもない奥方を多く抱えざるを得なかった天皇としては、毎日顔を合わさずに済むことは都合のよいことでもありました。一方尚侍や尚典は毎日のように天皇の身の回りの世話をするために顔を合わせるのですから、気心の知れた女性を内侍司に入れるのは当然のことでした。



律令制度で後宮の12司が設けられましたが、その筆頭に置かれたのが内侍司でした。その職務は天皇の身の回りの世のほか、天皇への奏請、天皇からの伝宣を取り次ぎ、後宮に仕える女官全般を取り仕切るものでした。この長官が尚侍、次官が尚典で、その権力は絶大なものでありました。

実は光仁天皇が宝亀8年（777）に次のような勅を出しています。「天平宝字4年の格を調べてみると『尚侍と尚蔵の職掌は重いので、諸人とは異にして全封戸を支給せよ』とある。しかれば、官位と禄は同等なのが理屈である。尚侍は尚蔵に准じ、典侍は典藏に准じるようにせよ。」淳仁天皇の天平宝字4年に、内侍司と内蔵司は重要な職務を担っているのに、他の司と異なって（他の司は半額でもよいが）この2司は全額を支給するようにと定められたのに、内侍司は半額しか支給されていなかった。これは不当であるから、地位も給与も内蔵司と同じように訂正するように、と光仁が命令したわけです。これによって、宮中の財務を扱う内蔵司と内侍司の格が同一と見なされて筆頭の位置を占めるようになったのでした。

787年に天皇は継縄の屋敷に立ち寄りそこを行宮とされ、明信はこの時から従三位に昇進します。そして尚侍に任じられ後宮を仕切るトップレディの座に着いたのでした。

② 明信の昇進

明信の昇進は継縄と共に目を見張るほどの早さでした。明信が上級官人である従五位下に任じられたのは、称徳帝の頃のことと思われますが、光仁天皇が770年10月1日に即位するとすぐに、官人たちを昇進させています。継縄はこの時に従四位下から従四位上へと昇進していますが、明信は10月25日になって従五位下から正五位下に昇進しました。従五位上を飛ばしての2階級特進だったわけです。その理由は分かりませんが、宮廷内においての働きが認められたのでしょう。翌771年の2月13日に光仁は交野へ行幸されています。継縄の招待に応じてのことと推測されますが、昇進のお礼の意味が大きかったのでしょう。

その後桓武は度々交野へ行幸され遊獵されます。そして継縄の別業を行宮として滞在されました。明信はこの間昇進を重ねますが長岡京時代の昇進が著しいようです。

- ・ 775 光仁 宝亀 6年 8月10日 正五位下から正五位上へ
- ・ 780 " 11年 3月 1日 正五位上から従四位下へ

・ 7 8 1	〃	天応	元年	1 1 月 2 0 日	従四位下から従四位上へ
・ 7 8 3	桓武	延暦	2 年	1 0 月 1 6 日	従四位上から正四位下・尚典へ
・ 7 8 5	〃		4 年	1 月 7 日	正四位下から正四位上へ
・ 7 8 7	〃		6 年	8 月 2 4 日	正四位上から従三位・尚侍へ
・ 7 9 7	〃		1 6 年		能登国の没官田 7 7 町を賜る
・ 7 9 9	〃		1 8 年		従三位から正三位へ
・ 8 0 6	〃		2 5 年	3 月 2 4 日	(桓武天皇崩御)
・ 8 1 5	弘仁		6 年	1 0 月 1 5 日	従二位尚侍として死去

(2) 野中ふる道

桓武と明信の関係は殆ど公然のものでした。類聚国史の曲宴の条に載せられた「野中ふる道」の歌のやり取りは大変有名な話だったようです。

① 曲水の宴

延暦 1 4 年 (7 9 5) 4 月 1 1 日に行われた宮中での曲水の宴、金谷伸之氏の小説「野中ふる道 (百済王明信伝)」には次のように書かれていますので、その全文を転載させていただきます。小説ですから事実と異なる点があるようですが、枚方・交野の七夕伝説地を絡ませていますので面白いと思います。なお小説は、2. 延暦二十五年三月二十四日：桓武臨終、3. 大同六年九月十二日：明信復讐、と続きますが割愛します。

【1. 延暦十四年四月十一日：宮中曲宴】

その日、桓武天皇は殊の外の上機嫌であった。春の日差しはうらうらと明るく、柔らかな春風が頬を撫でて渡る。それだけで、もう心が浮き浮きするようであった。

昨年十月に、いまわしい思い出ばかり残る長岡京を捨てて遷都してきたばかりのこの平安京で、初めて迎える春である。新しい大極殿は、薨をまばゆいばかりに輝かせていた。列柱の朱色が目に染みる。そうした中、神泉苑で開かれた曲水の宴。

すでに、杯を傾けること幾度、ほろ酔い気分の桓武は、尚侍として、やや離れた席にいる明信の方を見やって微笑んだ。

百済王明信。彼女は、朝鮮半島の南西部を占めていた百済の国が、新羅と唐によって滅ぼされた時に、わが国に亡命して来た百済の王子禪広（善光）に始まる百済王家の娘。善光から数えて五世の孫に当たる。聖武天皇の大仏建立に当たって、大仏に鍍金するための黄金を陸奥国より献上し、一躍して異例の出世を遂げ、河内守となって、交野郡に広大な土地と屋敷を給わった敬福は、彼女にとって祖父である。そして、彼女こそ、桓武天皇がまだ山部王と呼ばれて、日の当たらない、世間から忘れ去られた王子であった頃の初恋の女性なのである。

微醺を帯びた桓武は、明信を見て微笑むと、急に立ち上がり、「よし、それでは、朕が、歌を歌うぞ。この歌は古歌ぞ」
そう言いながら、朗々とした声で歌い始めた。

「古（イニシエ）の 野中古る道 改めば 改まらんや 野中古る道」



萬亀楼の有職料理

歌いながらも、桓武の脳裡には、あの交野の中山観音寺から天野川の逢合橋へ下る細い野中の道が、ありありと浮かんでいた。

私も若かった。橋の袂で待っている明信に逢うために、小走りに、あの野中の道を急いだものだった。目を閉じると、あの日の胸のときめきが、今もそのままに蘇ってくる。帰れるものなら、もう一度、あの日に帰ってゆきたい。“改めば、改まらんや・・・”、彼にはその言葉が、彼の万感の思いを、いみじくも語っているように思われた。

明信にも、あの夏の日のことが幻のように浮かび上がってきた。天皇が、自分のことを歌っていることは明らかだった。もう、あれから、四十年近くもの時が流れていると云うのに、固く抱き合ったあの日の感触は、昨日のこのようであった。

あれは七夕の祭りの日であった。貧乏皇子の山部王と逢うなどという、決して許しては貰えないから、七夕の織姫様を祀ったと云う交野の機物神社にお参りすると云う口実で、乳母一人だけを連れて、約束の橋の袂で待っていたのだった。そして、あれが、私がまだ娘であった時の、あのお方との初めての、そして、ただ一度だけの抱擁だった。あれからしばらくの後、私は親たちの強い命令で、今をときめく藤原南家の嫡男継縄さまの妻となったのだった。しかし、どうして、あの日のことが忘れられよう。

桓武が歌を歌い終わると、群臣たちは一斉に拍手を送る。明信は、人々の目が自分に注がれているのを感じて、うつむいた。そして、ほんと、頬が赤らむのを感じた。

彼女が、若い日の桓武の恋人であったことは、誰知らぬ者もない公然の秘密であった。しかし、このように、有司百官の前で堂々とそのことを歌われては、消え入りたいような気持ちだった。

その時、桓武は、

「尚侍、座興じゃ、この歌に和して、返し歌せよ」

突然にそう云われて、明信はうろたえた。

「は、はい、・・・」

そうは応えたものの、頭の中は真っ白だった。

もとより、歌の素養も人並み以上のものを持っている彼女である。しかし、天皇に、このように歌いかけられて、遠い日の思い出の中に夢見心地でいた彼女には、急に返し歌をと云われても、心は、まるで、この春の霞の中に浮いているようで、頭の中には何一つ浮かばなかった。

人々は、あらためて、彼女の方に拍手を送って、口々に、

「尚侍どの、返し歌、いたしませ。とく、返し歌を」

と云う。

明信は、その声に、我にもあらず取り乱した。

桓武は云う。

「そのように急がすものではない。尚侍、ゆっくりと詠まれるがよい」

そして、杯を取り、一杯、二杯、飲み干す。

その間にも、またも、

「とく、返し歌いたされよ。尚侍どの・・・」

と云う声が聞こえる。

その声にせかされるように、明信は立ち上がった。そして、声を張り上げた。

「君こそは、・・・」

しかし、そこまで歌って、絶句してしまった。



中山観音寺跡の牽牛石

t 天皇の玉座の近くには、その御子を儲けた女性たちが居並んでいる。乙牟漏皇后、旅子夫人らは、すでに亡き人になっているが、吉子夫人をはじめとして、妃・夫人・嬪・女御などの称を持つ女性たち、その数二十数人が居並んでいる。その人たちの前で、いくら公然のこととなっているとは云え、女官に過ぎぬ我が身が、天皇に愛の歌を返してよいものか。誇らし顔に、そのような歌をもって答えると云うことは、はばかりあることである。更に、居並ぶ群臣の中には、自分の夫なる右大臣藤原継縄もいる。・・・さりとて、愛の歌に対しては、愛の歌をもって答えるのが返歌の習い。

一瞬、頭の中をよぎったその思いに、彼女は絶句してしまったのである。彼女は呆然として立ちつくす。

それを見ると、桓武は、一瞬にして、明信の心の中を察した。

「いや、これは、座興が過ぎたようじゃ。尚侍、よい、よい、もうよい。その後は、朕が代わって詠んでやろう」

そう云いながら目をつぶり、大きな息を吸い込み、声を張り上げた。

「君こそは・・・忘れたらめ にぎ玉の たおやめ我は 常の白玉」

あなたは、口ではうまいことを云っておられますが、本心では、私のことなど、もう、とっくに、お忘れになっておられるでしょう。あなたを思う私の白玉のような心は、あの日とちっとも変わっていませんものを。という意味である。

それは、愛し合う男女の相聞の歌である。

居並ぶ群臣は、万雷のような拍手を送る。その中の一人二人が立ち上がり「万歳」と叫んだ。それに和して、他の者たちも総立ちになり、

「万歳、万歳、万歳」と、三度声を上げた。

明信は恥ずかしいやら嬉しいやらの思いの中で、座に坐ったまま、うつむいていた。

が、急に、くっと頭を上げると、桓武の方を見て、にっこりと微笑んだ。すると、急に目から涙がぼろぼろとこぼれてきた。

② 百済王の女性たち

明信の桓武から受けた寵愛によって、明信の後宮における権力は絶大なものとなり、百済王家の多くの女性たちが桓武のほか、嵯峨・仁明と続く天皇の後宮に入り、親王や内親王を生みました。この間に平城・淳和天皇がありますが、この2帝には一人の女性も入れていません。

桓武が崩御すると皇太子の安殿親王が皇位を嗣いで平城天皇となります。そして安殿の弟の賀美能親王が皇太弟となりました。桓武は安殿をあまり信用しておらず、賀美能に後を託していたかも知れません。明信は桓武の意思を受けて賀美能を立てていましたから、安殿とは心が通っていなかったでしょう。また安殿にしても明信を重んじず、天皇になると明信を解任して自ら寵愛する藤原薬子を尚侍に任じます。しかし、平城が退位して賀美能に譲位し嵯峨天皇が誕生、明信は名誉を回復し従二位尚侍として生を全うしたのでした。この間の事情については第六部の中でお話したいと思います。

明信が後宮に送った女性たちを列挙しておきましょう。仁明朝の尚侍になった慶命は明信以上に才色兼備の女性で、仁明の信頼が厚かったようです。しかし、百済王家からは妃や夫人などを出すことができなかったのが、一つの限界だったのかも知れません。

	(天皇)	(地位)	(親王・内親王)
・孝法	桓武	掌膳	従五位上
・恵信	桓武	宮人	従三位
・明本	桓武	宮人	従五位下
・教仁	桓武	宮人	従五位下 大田親王

・教法	桓武	女御	従四位下	
・貞香	桓武	宮人	従五位上	駿河内親王
・真徳	桓武	女孀	従五位下	
・真善	桓武	女孀	従五位下	
・貴命	嵯峨	女御	従四位下	忠良親王、基良親王、基子内親王
・慶命	嵯峨	尚侍	従一位	源定、源鎮、源善姫、源若姫
・永慶	仁明	女孀	従五位下	高子内親王
・豊俊の女	仁明	宮人	従五位下	源多、源光

4. 平安京

(1) 平安遷都

長岡京に移って10年、桓武は今度は葛野の地への遷都を敢行します。平安京と名付けられたこの都は以来千年の歴史を誇りました。

① 遷都の理由

長岡京へ移ってから10年も経たないうちに桓武はどうして再び遷都を考えたのでしょうか。種々の問題が重なって桓武が心理的に追い込まれたというのがその理由でしょう。

1. この間皇族方の死亡が相次ぎました。延暦7年(788)に夫人旅子が若くして没し、その後数年の間に、桓武の母皇太后高野新笠、皇太子安殿・賀美能親王の母である皇后乙牟漏が相次いで死去します。この凶事は早良親王の怨霊の祟りであるという妄想に桓武は悩まされました。そして淡路国府に命じて早良親王の陵を改造させます。

2. 延暦9年(790)の秋から冬にかけて豌豆瘡が長岡はじめ畿内に大流行し、多くの人命を奪いました。これは新都建設の大きな妨げとなりました。

3. 延暦10年(791)8月、盗賊が伊勢神宮を襲い、正殿・財殿・門・垣などが放火によって消失しました。桓武は直ちに参議紀古佐美を派遣して神に出火を謝し、再建を図ります。

4. 皇太子安殿は、かねてより伊勢神宮を崇敬していましたが、この頃より心身に異常を来してなかなか快癒しませんでした。朝廷の陰陽師はこれを占って早良親王の怨霊が取り付いていると宣言します。桓武は諸陵頭を淡路国に遣わして早良親王の霊に陳謝の心を表します。

5. 新都の建設が始められると貴族高官をはじめ多くの人たちが周辺に住居の建設を始めるのが通例ですが、長岡京は極めて不人気でそのような動きが鈍く、いつまでも活況を呈しませんでした。それに建設の速度も極端に遅くて、延暦10年(791)9月になってやっと、平城宮の諸門を壊して長岡に運んでいるという始末です。蝦夷征伐によって貴族も民も疲弊し、長岡への移転について労務の提供を渋った結果でした。それに、早良親王の怨霊に対する桓武の恐怖心は周囲の人たちにも蔓延して、新京全体が沈滞したのです。また、このような周辺のムードが桓武の恐怖心を一層増幅させる結果となりました。

6. 更に付け加えるならば、水害の問題がありました。水利が良いということは水害も大きいということになります。和氣清麻呂は治水にも才覚があったので摂津大夫という職を与えられていて長岡京についても対策を考えていたと思われますが、その困難さも承知していたのではないのでしょうか。最近の発掘調査は長岡京に洪水の痕跡があることを突き止めています。

桓武に対して再度の遷都を提案したのは和氣清麻呂でした。清麻呂は摂津大夫という職掌から、

平城京から難波への遷都を提案していたようですが、秦氏をバックに持つ藤原種継の長岡京遷都案に負けたのでした。種継が死亡し長岡京が不人気で天皇が悩んでいる今、秦氏の影響の強くて水害に強い別の場所への遷都を勧めたのでした。桓武は延暦11年(792)の1月と5月に葛野で遊獵していますが、恐らく清麻呂が同行して下見をしたでしょう。1月は全体の地形を確認し、5月は京の青図を持ってその可能性を確認したのでしょう。

翌延暦12年(793)、桓武は大納言藤原小黒麻呂・佐大弁紀古佐美らを派遣して葛野の地を視察させています。宮廷の中心的人物に桓武は遷都の意思を伝えて現地の確認をさせたのでしょう。そしてその6日後に朝廷は長岡京を毀しにかかっています。この慌ただしさは桓武の心境を表すものであり、また貴族高官も長岡京に対してかなりの不快感を持っていたことを示しているものと考えられます。造宮使長官には小黒麻呂が選ばれましたが、彼が秦氏の女を妻にしていたことが大きな理由と思われる。そして、小黒麻呂の力によって秦氏の協力が得られるようになると、造宮その他の建設に実務的な能力の高い和氣清麻呂が造宮使長官として後事を任されたのでした。

② 秦氏の貢献

秦氏は有名な渡来人の一族です。渡来の経緯については日本書紀の応神条に記述があります。応神14年に弓月君が百済からやってきて、「私は私の国の120県の人民を率いてやってきました。



秦 河勝

しかし新羅人が邪魔をしているので、みな加羅国に留まっています」と奏上しました。そこで葛城襲津彦を遣わしたのですが、襲津彦は3年経っても帰ってきません。新羅が邪魔をして帰れないのだろうと、今度は他の二人を派遣して新羅の国境へと向かわせました。恐れをなした新羅は弓月君を帰還させました。と言うことで、弓月君(秦氏の祖)は百済から来たようになっています。恐らく弓月君は新羅の勢力が強かった加羅地域のどこかの国の有力者であり、集団で渡来を試みた人たちの指導者的な人物だったと想像されます。

しかし、秦氏は新羅の人であるという説もあります。新羅の古い行政単位の中に波旦県というのがあって、秦氏はこの波旦県から来たからハタを名乗ったのだということです。地名と氏名とは密接な関係がありますからこれには一理ありそ

うですが、波旦県というのはちょっと辺鄙なところですから、120県の民を率いてやってきたという記述とはあまり結びつかないような気がします。

このほかに機織りのハタであるとか、梵語では絹織物をハタと言ひ、秦氏はその絹織物をわが国にもたらしたのでハタと呼ぶのだとか、更に韓国語で海のことをパタと言うが、秦氏が海の向こうから来た代表的な氏族であるのでそう呼ぶのだとかと、諸説が入り乱れています。しかし、秦氏とは一つの氏族を指すのではなくて、弓月君と共にやってきた多くの氏族を総称して呼んでいるようで、秦を名乗る姓は全国各地に存在しています。長岡京や平安京の建設に協力したのは葛野秦氏でした。なお太秦(ウズマサ)という姓が秦氏と共に出てきますが、これについては、秦造酒が各種の村主を率いて租税として作られた絹を献上し朝廷に沢山積み上げたのに対して、雄略天皇が「うつまさ」(うずたかく積んだ様子)の姓を給わったということが日本書紀に書かれています。

長岡京の主計頭が秦足長で、主計介が太秦紀公宅守です。前述のように太秦も秦氏の一族ですから長岡京造営時代の財政は秦氏が握っていたことになります。これは秦氏の女性を妻とする造宮長官藤原小黒麻呂の差配によるものではありませんが、秦氏が造宮費用の多くを提供していた証拠となるものでしょう。保津川の治水を行ったのは秦氏です。保津川は亀岡盆地から溪谷を駆け下って葛野の平野に流れ込みますが、大雨の後には葛野を水浸しにしました。この治水を行ったのが秦氏でし

た。大きな堰を築いて水流をコントロールし、葛野の灌漑にも大きな貢献をしたのです。このようにお金は持っている、治水の技術は持っているという秦氏を和氣清麻呂は平安京の建設においても協力依頼をしたのです。

③ 国宝第1号弥勒菩薩像

秦氏は京都とたいへん関係が深い氏族です。京都太秦の広隆寺というお寺がありますがこれは秦氏の氏寺です。ここに国宝第1号に指定されている木造の半跏思惟弥勒菩薩像があります。この像を見たドイツの哲学者ヤスパースが「地上のあらゆる束縛を超越して到達した人間存在の最も清浄で円満かつ永遠の姿」と言って絶賛したことは有名です。

この木造の材質は赤松で、飛鳥時代の仏像の殆どが樟であるのに大変珍しいと言われています。この像が国産なのかどうか、材質の赤松が半島に多いところから朝鮮半島からもたらされたものとの見方が有力です。では百済からか新羅からか、まだ決定的な証拠はなくて次のように両説が言われています。

622年に称徳太子が亡くなり、その翌年に新羅が太子の菩提を弔って仏像を送って来ます。それがこの弥勒菩薩像であるとする、これは新羅から来たということになります。しかし603年推古天皇の11月11日に称徳太子が、ここに尊い御仏の像があるが誰か祀らないかと言われますと、秦河勝が「私が祀ります」と名乗り出て、寺を建てて祀ったのがこの仏像であるとする、百済からということになります。その寺は葛野秦寺と言われ蜂岡寺とも言われていましたが、それが広隆寺となりました。葛野秦寺は白梅町で発掘された北野廃寺が比定されていますが、平安朝の初め頃に今の太秦に移ったものと考えられています。



また、称徳太子の子山背大兄王子が蘇我氏に攻められて生駒に逃れますが、三輪文屋君が深草へ行くことを勧めます。深草はやはり秦氏の一族が住み着いた場所で、称徳太子とは深い関係にありました。伏見稻荷大社は和銅4年(711)の創建とされますが、秦伊侶巨という人が建てたものです。代々秦姓の人が社家を継いできました。京都の寺院も神社も秦氏と深い関係があります。

このように葛野の有力者であった秦氏は和氣清麻呂の要請を受けて平安京建設に大きな力となりました。平安京生みの母とさえ言われています。平安京の建設で一番の問題となったのが加茂川(鴨川)の付け替え工事でした。加茂川は以前は現在の堀川のところを流れていましたが、京の条里を造るためにはこの川の流れが邪魔でした。それで条里の端(京極)から東の外に付け替えられたのですが、秦氏の技術が大いに利用されました。

(2) 平安京の特色

平城京が中国の都城を真似て「君子南面」を実現した最初の本格的な都でしたが、平安京は更に進んで中国の都城に近付けた都造りを計画したのでした。

① 平安京の都城

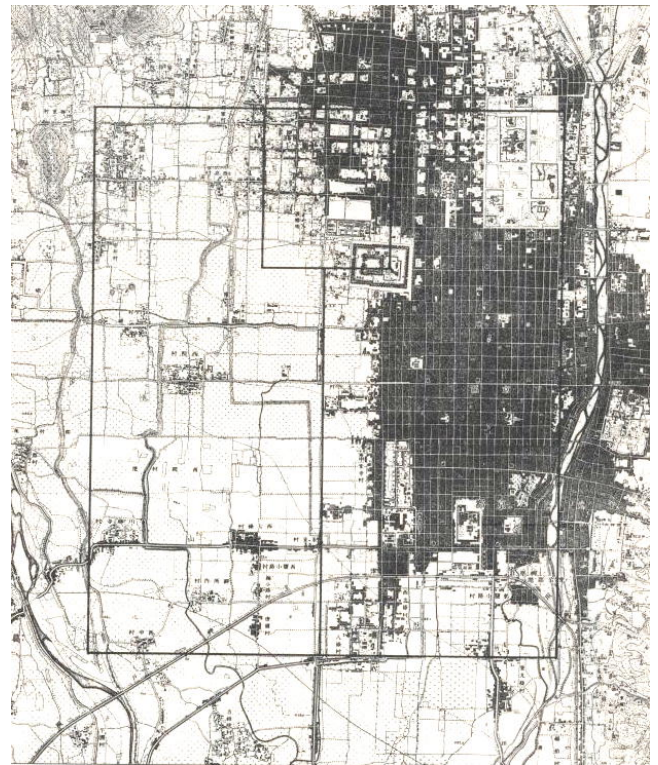
まず第1に中国的な特色を挙げますと、都の周囲に城壁を回らそうとしたことでしょう。中国随・唐の都長安では、外敵の侵入を防ぐために周囲に城壁を回らし、出入りする門を設けてこれを厳重に管理しました。

平城京では実際には南だけに城壁を造りましたが、他の3面には設置していません。平安朝では蝦夷との戦いは続いているものの、都へ攻め上られる恐れはなく、当面外国からの攻撃を心配することはありませんでした。あえて周囲に城壁を回らす必要はなかったのです。

では何故南面だけに城壁を造ったかといいますと、セレモニーのためだったようです。外国使節などが朝貢してきますと、当然南面した天子に向かって南より入城します。正面にあるのが羅城門でそこを通過して都に入ります。朱雀大通を進めば他の3面は目に入らず、城壁がなくても一向に差し支えないわけです。都長安を真似たといってもちゃっかりと手抜きもしていたのです。

この手抜きはプラスの面もありました。4面に城壁があれば門を通過して出入りしますが、そこには厳しい警備が行われているのですから、外部との交流には自ずと制約があります。しかし城壁がなければ出入りは自由で文化や物資が流れ込んで自然と活性化します。また、貴族・官人も都城内に住む必要はなく、住環境のよい郊外に住居を構えることが出来、また別業（別荘）の土地を自由に選ぶことが出来ました。東の加茂川を超えて東山へと町が拡大して行ったのも、嵯峨や宇治などが別荘地として栄えたのも、こうした平城京の特殊性がありました。平城京は条里の中だけではなく周辺を含めて都と見なければならぬと言われるのも理由のあることです。

第2は、都が中軸線である朱雀大通を挟んで左右対称に計画されたことです。現在の京都はその姿を留めていませんが、中軸線は今の千本通のところにあってその西側が右京、東側が左京です。右京は低湿地が多くて人が定住し難く、建都後間もなくして寂れてしまいました。中国に真似たのですが、自然条件には勝てず左京だけの都になってしまいました。今の御所は里内裏と言われて藤原家屋敷だったところで、藤原家の女性たちが生んだ親王たちが母と共に暮らしたところです。本来の内裏は千本通にその跡が確認されています。右に掲げた図面は明治初期のものですが、大きく四角に囲んだところが平安京の範囲です。右京は廃れていますが左京は京の範囲を飛び出して東の方に拡大しているのが分かります。中央上部の四角の枠が大内裏で、右上の四角の枠が里内裏、即ち現在の御所（御苑）があるところです。



第3に、平城京と同じく青い瓦と朱塗りの柱はこの平安京においても導入されました。「青丹よし・・・」と歌われた都の華やかな姿は、当時のすべての人々のあこがれの的だったでしょう。しかし、中国では大内裏の建物がすべてこの「青丹よし」だったのに対して、平城京では朝堂院や豊楽院などの主要建物に限定されています。天皇の私的な場所である内裏では白木の柱に茅葺きの屋根という日本古来の素朴な建物でした。中国を真似ながらも日本的美意識が働いたのだと思われます。それとも、城壁を南面だけに限ったことも建物を青丹にしなかったことも、蝦夷征伐のため財政的に困難があったのとも見るべきでしょう。

② 藤原北家の興隆

奈良時代、平安時代を通して権力を振るったのが藤原氏でしたが、その基礎を築いたのが藤原不比等であったことは前に述べました。大化改新以後の律令制の進展整備と共に、地方豪族や貴族官人の存在形態に大きな変化が生じますが、この過程を最も巧妙に切り抜けたのが不比等だったと言えるかも知れません。藤原という姓は鎌足が亡くなる時に天智から授けられたもので、その前は中臣を名乗っていました。中臣氏は元来神祇に携わっていた氏族でしたが、不比等は藤原姓を受け継ぐと共に神祇職を捨てて、朝廷の中枢に入り込み政治のあらゆる面に介入するようになります。

不比等の才覚ですが、この立場の変更が藤原氏を大きく成長させたのでした。

一方、大伴氏は最後まで天皇の兵たることに拘りました。天皇は我々が守るという意識を強く持っていて武将であることを誇りにしていたのです。百済王敬福が聖武天皇に金900両を献上した時に、「すめろぎの御世栄えんと 東なる みちのく山に 黄金花咲く」と詠んだのは大伴家持でしたが、その長歌の中に、「海行かば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大君の縁にこそ死なめ 顧みはせじ」という戦時中には軍部によって大いに利用された歌があります。護国の英霊に捧げる歌として毎日のように聞かされた歌でした。これは大伴氏族の歌であって、これを歌って氏族の兵士たちを鼓舞したのです。大伴氏は天皇家との人間的な結び付きの中で、氏族としての発展を遂げてきたのです。しかし、律令制が進展して軍事に関する近衛府や衛門府などの役所が整えられてくると、大伴氏が誇りとした役割は制度の中に取り入れられてしまいます。大伴氏でなくても適任者がいれば取って代わることが出来ることになってしまったのです。こうして、立場を失った大伴氏は没落の道を歩むことになりました。

百済王家もまた、蝦夷討伐など武家としての特殊性が強かったのではなかったでしょうか。蝦夷討伐が終わると役割を失い、大伴氏と同じような運命を辿ったような気がしてなりません。

藤原三家は、互いに競い合いながら成長しました。不比等の子三人は天然痘によって相次いで亡くなりましたが、権勢はその子孫に受け継がれました。多くの子供に恵まれたことが大きな力となりました。時に反逆者が出て、他の家や他の子孫がそれをカバーして没落を免れています。政権に対する飽くなき野心が一族に横溢していたのかも知れません。不比等が女性を天皇家に結び付けることによって台頭したように、その子孫たちもこの手を上手く利用しました。それをタイミングよく行って長い繁栄を築いたのが藤原北家でした。平安時代は藤原北家の時代と言っても過言ではないでしょう。



枚方市中宮にある百済王神社